



はじめに
 国分松本遺跡第 14 次発掘調査は田中・土居先線道路工事に伴う埋蔵文化財の調査です。今回の発掘調査によって、筑前国分尼寺に関連する遺物が見つかりました。また、建物跡が数棟見つかり、出土した遺物から国分尼寺に関わる建物であったことが推測されます。

遺跡の歴史的環境
 国分松本遺跡は四王寺山から南西方向に広がる扇状地に立地します。東側には筑前国分寺跡、西側には国分尼寺跡があり、南側には戸籍・計帳制度を示す木簡が出土した国分松本遺跡第 13 次調査があります。

今回の調査地周辺では、筑前国分尼寺跡第 14 次調査で奈良時代の掘立柱建物跡が確認されており、筑前国分尼寺跡第 7 次調査では南北に伸びる溝が確認されています。遺物は奈良時代から平安時代の遺物のほか、弥生時代の遺物も出土しています。



筑前国分寺・国分尼寺とは

国分寺・国分尼寺とは、聖武天皇が仏教の力によって国を安定させることを目的に、天平 13 年 (741 年) に出した「国分寺 (こくぶんじ) 建立 (こんりゅう) の詔 (みことのり)」により全国で造られたお寺です。

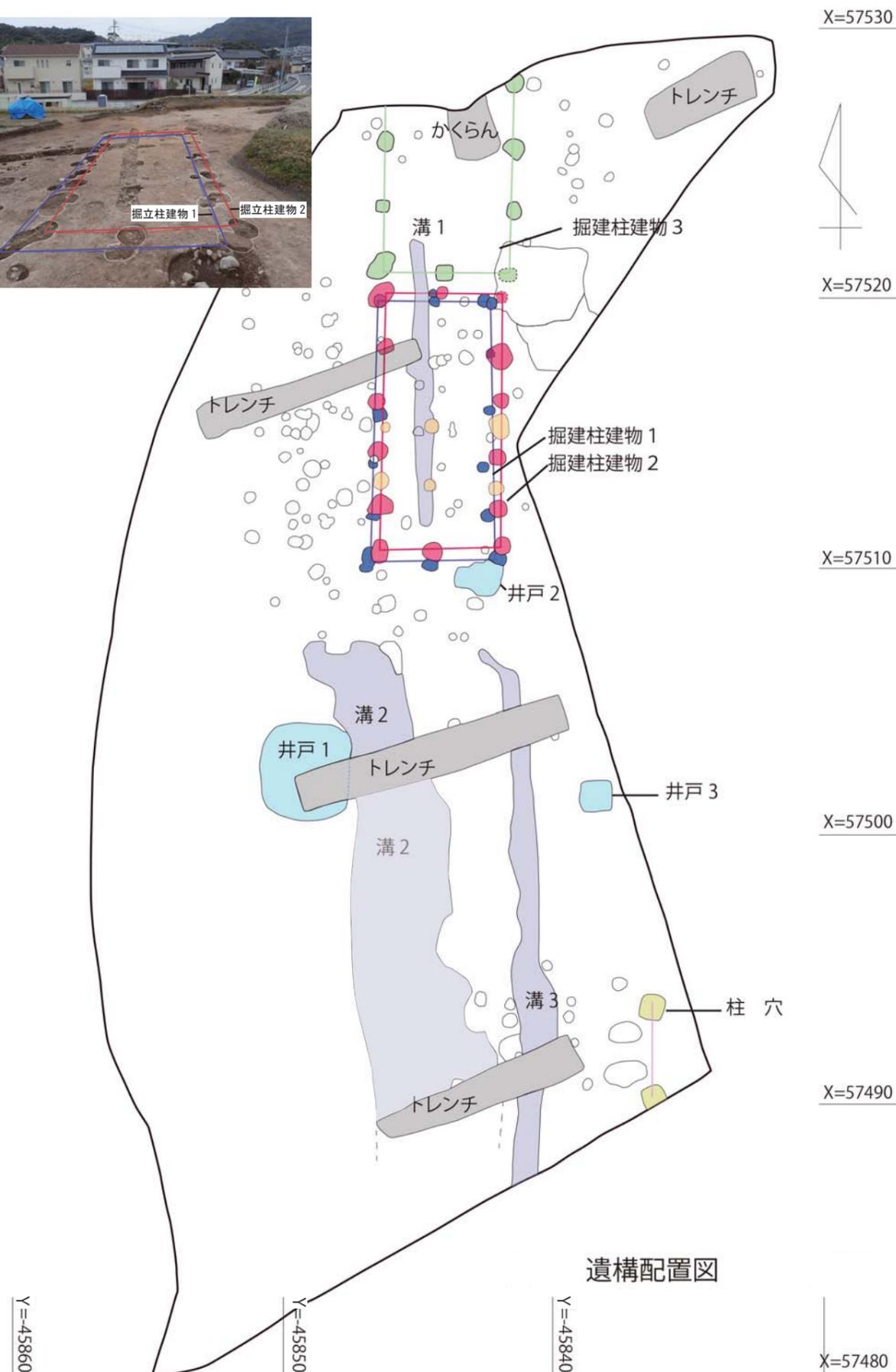
現在、筑前国分寺は国の史跡に指定されており、塔跡や講堂跡が残っているほか、回廊の一部が復元されています。国分尼寺については国分寺と同様に古くからその存在が知られており、国分寺の西側に推定されていました。これまでの調査で尼寺の南門と考えられる柱穴や、区画溝が確認されています。

今回の調査で見つかった主な遺構と遺物

掘立柱建物

3 棟見つかりました。このうち規模が判明しているものは、掘立柱建物 1 と 2 です。調査から掘立柱建物 1 の後に掘立柱建物 2 が建てられたことがわかっています。規模も柱間もほとんど変わらず建て替えられています。掘立柱建物 3 は調査地の北側で見つかった建物です。建物は調査地外へ伸びているため全容はわかりませんが、南北棟の建物であることや、柱間の間隔が掘立柱建物 1・2 に似ていることから、同様の規模の建物であったことが考えられます。そのほか調査地の南東隅でも柱穴が見つかりました。平面を四角に掘られた柱穴の中には柱材が残っており、周りには柱材を固定するために石を詰めている状態を確認しました。2 基のみ確認のため、掘立柱建物もしくは柵であった可能性があります。

また、調査地から東へ約 30m の地点では、筑前国分尼寺跡第 14 次調査が行われており、奈良時代の掘立柱建物が見つかりました。ほぼ同時代に、南北棟の建物が並行して位置することから、一体のものとして企画性をもった建物であることが考えられます。



遺構配置図

井戸

井戸1は見つかった井戸の中でも一番大きく、井戸の木枠が残っていました。規模は外枠縦横約130cm、中枠縦約90cm・横約60cmを測ります。井戸の中からは瓦のほか土師器や須恵器が出土しており、土器の中には文字が書かれた墨書土器を確認しています。特に「花寺」と書かれた墨書土器が出土しており、尼寺との関連が推測されます。その他、ベルトの飾り石である石帯（せきたい）や数珠玉状木製品が出土しています。奈良時代後半から平安時代の遺物が出土しています。

溝

南北に伸びる溝を3条確認しています。このうち溝3は国分尼寺跡第7次調査で確認された溝に繋がることがわかりました。正方位に沿ってみられることから区画溝と考えられます。国分尼寺の伽藍地外に建てられた建物を区画する溝かもしれません。溝からは弥生土器、奈良から平安時代の遺物が出土しています。



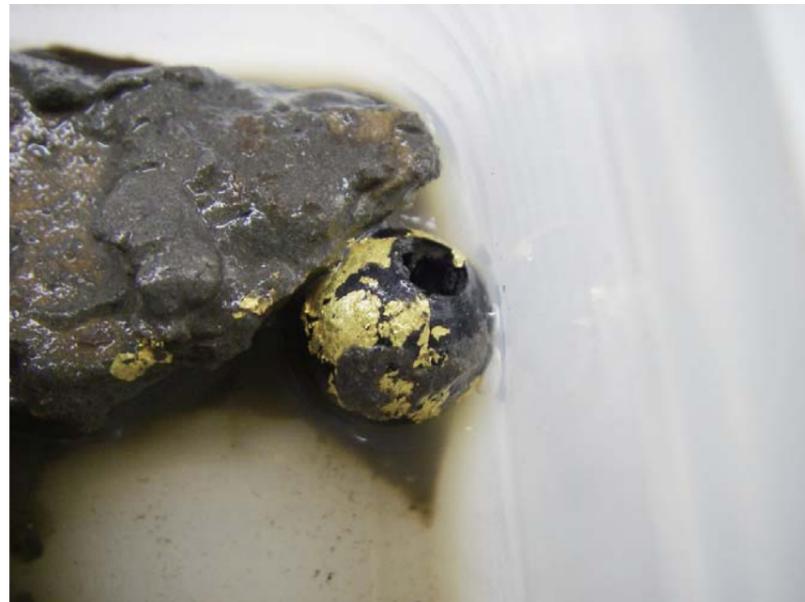
墨書土器 「花寺」



墨書土器 「大?田」



ベルトの飾りの石帯「巡方（じゅんぼう）」



数珠玉状木製品

出土遺物

遺跡内からは奈良時代から平安時代にかけての土器が出土しています。その中で墨書土器を10点（土師器8点、須恵器2点）確認しています。

このうち、土師器皿の外側に「花寺」の墨書を確認しました。この「花寺」については、埼玉県熊谷市寺内廃寺跡、奈良市法華寺（総国分尼寺）、上総国分尼寺跡、甲斐国分尼寺跡で見つかっています。国分尼寺の正式名称である「法華（ほっけ）滅罪之寺（めつざいのてら）」を示すことが知られています。甲斐国分尼寺跡では「法寺」の墨書土器が出土しており、上総国分尼寺跡では「法花寺」の墨書土器が出土しています。古代では地方の国分尼寺を「法華滅罪之寺」の略称として「法花寺」・「花寺」・「法寺」の字を使用していたことが知られています。今回の調査で出土した墨書土器については、調査地の西側に筑前国分尼寺の伽藍があることから、筑前国分尼寺を示しているものと言えます。

また、墨書土器のほか、ベルトの飾り石である淡緑色を呈する石帯（巡方）が出土しました。大きさは縦3.5cm、横4cm、厚さ6mmで、石材は蛇紋岩と考えられます。裏面には墨書を確認しており「九」と書かれていることがわかりました。そのほか、数珠玉状木製品が出土しています。径1cmほどの珠の中央には穴がけられており、表面には金が貼られています。

遺跡の成果と位置づけ

- ・今回の調査地は国分尼寺の伽藍地外の東側に位置する。
- ・井戸から墨書土器が出土。尼寺を意味する「花寺」の墨書を確認した。
- ・筑前国分寺と国分尼寺の間で、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物を確認した。
- ・今回の調査で見つかった建物のほか、筑前国分尼寺跡14次調査で見つかった建物を含め、同様の時期に同規模の建物が並行してみられることから規格性のある建物と考えられる。

以上より、見つかった掘立柱建物と井戸は、国分尼寺に関連する施設であったと考えられます。施設については、寺の経営に関わるものや、寺院生活を営むための施設などがあります。

上総国分尼寺跡でこれらの施設の存在が確認されていることから、今回見つかった建物跡については筑前国分尼寺の付属施設の一つであった可能性が考えられます。

今回の調査によって、西側で見つかった寺院の伽藍が国分尼寺であったことが考古学的に証明されたこととなり、筑前国分寺と国分尼寺の領域と周辺の土地利用を探るうえで大きな成果を得ることができました。

【お知らせ】

今回出土しました遺物の一部は、平成27年4月1日～10日まで太宰府市文化ふれあい館で展示します。もう一度ゆっくり遺物をご覧になりたい方は、是非おこしください。